市史編纂だより

第６号　　摂津市教育総務部生涯学習課市史編さん係
令和２年３月発行　　〒566-0023 摂津市正雀４丁目9-25 摂津市民図書館内 TEL 06-6319-0587

◎摂津市ゆかりの刀剣 ―鳥養来国次（とりかいらいくにつぐ）と鳥養国俊（とりかいくにとし）―

◆刀剣ブームと「銘尽（めいづくし）（龍造寺本（りゅうぞうじぼん））」の新発見

近年、ゲームをきっかけとして女性を中心に刀剣ブームが巻き起こっています。 その人気にこたえて、全国各地の博物館で刀剣の大規模な特別展が相次ぎ、焼失・行方不明の刀を復活させるためのクラウドファンディングなども実施され、2017年には実際に熊本県の阿蘇神社の宝刀「蛍丸（ほたるまる）」（来国俊（らいくにとし）作・鎌倉時代）が復元されています。

図１「観智院本銘尽（かんちいんぼんめいづくし）」（国立国会図書館蔵）

ところでこうした刀剣への熱い眼差しは、今に始まったわけではありません。長らく現存する日本最古の刀剣書とされてきたのは、応永30年（1423）に書写された「観智院本銘尽」で、その原本は鎌倉時代末の正和年間(1312～17)に遡るものとされています。また最近、「観智院本銘尽」よりもさらに古い観応（かんのう）２年(1351)以前に書写されたと考えられる「銘尽(龍造寺本)」も佐賀県で発見されました。つまり原本こそ現代には伝わっていませんが、鎌倉時代にはすでに刀工名や略歴、作風などをまとめた刀剣書がつくられていたことがわかります。

◆「享保名物帳（きょうほうめいぶつちょう）」と名物刀剣

さらに刀剣書が広く人々に受用されていくきっかけとなったのが、江戸幕府八代将軍徳川吉宗の命令によって、享保４年（1719）11月に本阿弥光忠が献上したとされる「享保名物帳（きょうほうめいぶつちょう）」の存在です。この「享保名物帳」は、 古刀と呼ばれる古い刀剣のうち、名刀を約236～274口(写本により口数に異同あり）集録したもので、刀剣の寸尺・評価・所蔵者・由緒などが記されています。この刀剣書に掲載された名刀は、のちに「名物刀剣」「名物」と呼ばれ、現代ではその多くが国宝や重要文化財に指定されています。

では具体的に「享保名物帳」の内容を見ていきましょう。掲載順はまず、粟田口（あわたぐち）吉光（藤四郎）・正宗・郷（江）義弘・貞宗を挙げ、以下、山城国（宗近・来・長谷部国重・了戒・国永）、大和国(当麻・手掻（てがい）包永（かねなが）・保昌（ほうしょう））など各地の刀工達の名が続き、最後に「焼失名物帳」として大坂の陣など戦乱で失われた名刀を挙げています。そしてこの「享保名物帳」のなかに、摂津市ゆかりの刀剣が載っているのです。それが「鳥養来国次」と「鳥養国俊」です。

◆「鳥養来国次」と「鳥養国俊」

まず「鳥養来国次」は、鎌倉時代中期～南北朝初期に京で活躍した来派という刀工集団のひとり、来国次によって作刀された刀です。「享保名物帳」は「鳥養来国次」について、銘が有り、長さが７寸９分(23.9cm)であること、鑑定額が銀3500貫(大判金170枚)であることを記したうえで、その来歴を鳥養宗慶―鳥養与兵衛―豊臣秀次―豊臣秀吉―宇喜多秀家―徳川家康―徳川頼宣（紀州徳川家初代）―徳川秀忠―前田利常―稲葉正勝と載せています。

つまりこの刀は、鳥養宗慶父子を経て、戦国時代から江戸時代にかけて名だたる武将達のもとを移動し、大切にされていたことがわかります。

さらに「鳥養来国次」の詳細な分析を行った川見典久氏は、茶人として有名な千利休とこの刀とのエピソードを紹介しています（「〔受贈品紹介〕名物　鳥飼来国次」『古文化研究』第17号、2018年）。それは、千利休が織田信長から拝領した「宗易正宗」という短刀の拵えを本阿弥光徳に依頼した際、利休は以前に町で買った古鞘を見せて「こんな風に誂えて欲しい」と注文しました。するとその場に同席していた本阿弥光二が、「これは私がかつて製作した「鳥養来国次」の鞘だ」と言い出したので、当時、豊臣秀次が所持していた「鳥養来国次」と合わせてみたところ、その鞘に見事に納まった、というエピソードです。このように「鳥養来国次」は、風流な千利休を唸らせるほどの刀装をもつ名刀であったのです。

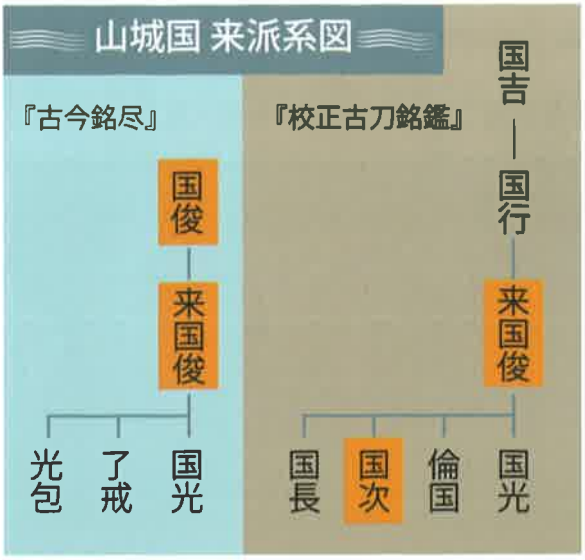

図２　山城国来派の主要刀工系図
現在に伝わる来派の系図には異同が多く、国俊を国行の子とする説や、同名の父子とする説もある。

つづいて、「鳥養国俊」は、同じく来派の来国俊によって作られた刀です。実は来国俊の刀剣には謎が多く、「国俊」と銘を切る二字国俊と、「来国俊」と銘を切る三字国俊の二種類があるのです。この二字国俊と三字国俊が同一人物なのか別人なのかについては、早くも室町時代から論争がありますが、いまだに決着をみていません。このうち「鳥養国俊」は、二字国俊の代表作とされる刀です。「享保名物帳」には、長さが１尺９寸９分(60.3cm）とみえ、その来歴は、鳥養宗慶―鳥養与兵衛―細川幽斎―細川忠興―石田三成―富田信高（伊勢安濃津城主）―徳川家康―徳川義直(尾張徳川家初代）と記されています。

このように「鳥養来国次」も「鳥養国俊」も,鳥養宗慶から子の与兵衛に伝えられたという来歴を持ち、それこそが両刀の「鳥養」という号の由来となっているのです。鳥養宗慶は、摂津市鳥飼地区を名字の地とする人物で、鳥養流という書道の一流の祖となった能書家として知られる一方、戦国大名三好長慶の被官として三ヶ牧井路の整備などにもあたっています。宗慶はこの他にも刀を所持する刀剣家でもあり、京粟田口吉光の作とされる有名な「庖丁藤四郎」も一時期所持していたことが伝えられています。

摂津市とゆかりのある鳥養宗慶が所持していたことで名付けられた、名物刀剣たち。博物館などで刀剣を鑑賞する際、刀剣の号に注目すると新しい歴史の姿がみえてくるかもしれません。

（曽我部愛）

◎明治維新と摂津市域―木戸孝允（きどたかよし）と淀川を通して―

嘉永6年（1853）のペリー来航以後、日本を取り巻く国際環境は急変し、欧米列強の脅威が迫るなか、これまでの江戸幕府の軍備・政治体制では国家を守れないという意識が高まってきました。その危機感のもとに新国家体制の樹立が目指され、明治の近代国家が築かれていきます。

この過程で、幕末、幕府に代わって京都の朝廷の権威が高まり、中央政治の中心は京都に移り、京都・大阪間を船などで往来する人々が急増しました。摂津市域の人々も、京都の伏見の警備や淀川の船の往来に関する任務を幕府から命じられるなど、政治変動の影響を受けました（『摂津市史』史料編3）。

今回は、このような幕末維新の変動を、摂津市域の人々が共に生きてきた淀川と、「維新の三傑」の一人として知られる長州藩（山口県）出身の木戸孝允の関わりを通して、見てみたいと思います。

◆幕末の動乱と淀川

幕府の体制変革を強く求めた長州藩は、文久2年(1862)頃から急速に勢力を伸ばし、木戸(当時の名は桂小五郎）も京都、大阪(大坂)、江戸を往来して国事に奔走しました。長州藩は次第に幕府勢力との対立を深め、元治元年(1864)7月、1600人の兵を京都へ上らせ、戦を起こし敗北しました（禁門の変）。戦は一日で終了しましたが、京都中心部南側約3分の2が焼け、「どんどん焼け」と呼ばれる大火事となりました。大阪からも煙が見えたといいます（『大阪編年史』24巻）。

図3　慶長四年大功記大山崎之図（国立国会図書館蔵）

慶応4年（1868）鳥羽伏見の戦いの図。青色が淀川、下が伏見、上が大阪方面、左上で大阪城が燃え上がる一方、中央右上の茨木・吹田など摂津市域周辺で火の手は上がっていない。題は、「太閤記」にかけて、慶長4年（1599）の徳川家康と豊臣方の争い（翌年、関ヶ原の戦いで徳川方が勝利）と、慶応4年の徳川方の薩長（旧豊臣方の島津・毛利）への敗北を風刺したものか。

幕府は、京都から敗走する長州兵を捕まえるため、伏見・山崎から大阪の樟葉や京橋など、京阪神にかけての川沿いを警備しました。大阪の桜宮では長州藩兵ら48人が捕まり、また木戸の養子であった勝三郎ら20人は捕まる直前に船中で自決したといわれています（『官祭招魂社と大阪』）（禁門の変関連の長州側の死者は約300人）。

当時、京都にいた木戸は、まずは但馬の出石に身を潜め、翌年に長州へ戻った後、長州藩を主導して藩の体制を制度・軍備共に立て直し、薩摩藩と手を組んで倒幕へと向かいました。

禁門の変から約3年後、慶応3年(1867)12月9日、薩長の計画のもと王政復古が行われ、幕府に代わる新政府（明治政府）が京都に誕生しました。翌年の1月3日、新政府内の薩長兵と幕府軍の戦いが京都の鳥羽・伏見で勃発し、幕府軍は敗北（鳥羽伏見の戦い）、薩長が新政府の中心となっていきました。今度は、幕府側が淀川沿いに敗走し、長州藩など新政府側がこれを追う展開となったのです。

この時、京都方面での戦火は淀川から一晩中見え、数日後には大阪城からも出火するなど、淀川沿いは混乱しました。鳥飼・柱本等の人々も子供や老人、荷物を避難させるなど、摂津市域の人々の生活にも影響が及びました（『戊辰日記』、『神安水利史』資料編上）。

この後、木戸を始め、多くの新政府関係者が京都・大阪間を船で激しく往来することになります。

◆維新後の「開化」と淀川をめぐる想い

鳥羽伏見の戦い後、京都へ出てきた木戸は、薩摩藩の大久保利通と共に新政府の主導者となり、4年後の廃藩置県の実施など、明治初期の集権化による新国家の確立を図りました。その木戸は新しい国家のあり方について、明治元年（1868）12月、次のように記しました。

国家の歳入の5分の3は海軍、5分の１は行政機構の整備、そして残りの5分の1は罹災者や困窮者などを救う費用・川蒸気（川で用いる蒸気船）や馬車など民の便利を図るために費やすべきである。これができなければ、「大政一新」（維新）はただ江戸幕府を倒しただけで、国家を維持するという目的を果たせない。そうなれば幕府の政治と50歩100歩で、何のために数千の志士達が犠牲になって新国家を築いたのかわからなくなる（『木戸孝允日記』）。

木戸は、維新後に大阪の桜宮を通過して故養子勝三郎の「遺霊」を拝し、京都の霊山護国神社で幕末に国事に倒れた者の祭典なども計画したように、生き残った者の責任を感じながら新国家建設に臨んでいました。国家を維持するという維新の目的は、欧米列強に劣らない軍備の充実や政府制度の設立が必要であるのはもちろん、川蒸気などによる人々の生活の安定と向上を実現させてこそ果たせると考えていたのです。同時期、普通教育の普及も建言しており、国民全体の力の底上げを目指していたといえます。もっとも木戸は、人々の生活の利便性を図ろうとした一方で、欧米の制度や技術などを形式的に導入し、実際の人々の行動や知識が追い付かないような表面上の「開化」には、この後、危惧を強めていきました。

木戸が例に挙げていた川蒸気が淀川で運行を開始したのは、明治3年(1870) 頃といわれています。木戸は、同年12月、大阪の難波橋から伏見に向けて蒸気船「利渉丸」に乗り、次のような感想を記しました。

蒸気船に乗るのはこれが初めてである。世の中が「開化」に向かっている今、往時を追懐すれば，その流れは遅いようで、実際は速いものだ。7、8年前のことを思い起こせば、自分が今、生存し、この船に乗っているということは意外中の意外である（『木戸孝允日記』）。

図４　淀川を航行する外輪船（蒸気船）
（国土交通省淀川河川事務所所蔵）

このように様々な思いを乗せた淀川に面した摂津市域の人々は、どのような思いで維新の急変を見ていたのでしょうか。　（齊藤紅葉）